

あまえ子育て

澤田 敬

認定NPO法人カンガルーの会

土居健郎は、日本人の精神構造の中には甘えがあり、甘えについては子どもから老人まで誰でも知っていると言っている。土居は主に精神内界の大人の甘えについて論じているが、子どものあまえ(子どものあまを平仮名で記す)は、心の中は同じでも、行動化が激しく、判断基準が大人と異なると思う。日本では子どものアタッチメント(愛着、ボールビー)の研究をする人は多いが、あまへの研究をする人はほとんどいない。しかし全ての父母(以下母と略す)は“アタッチメント”で子育てしてはなく、“あまえ”で育てている。あまえ子育てについて考えてみる。「あまえ」とは、子どもが自主的に、信頼している人に、全身の感覚器官(視覚、聴覚、触覚、臭覚、運動感覚)を使って、接近してゆく行動である」とした。子育ての大切な3要素、親子の心の響き合い(間主観性、トレヴァーソン)、子どもの心に応答する情緒応答性(エムデ)、子どもの心を抱きかかえるホールディング(ウィニコット)からできていると思われる。あまえて満たされると、心の安全基地(アインスワース)を作り、自主性、自尊感情が身につく。徐々に心の中に自分を守ってくれる親像を作り、青年期になると、親から独立する。母も、子どものあまえを受容することで、母親として成長する。あまへの度が過ぎるとわがままになる。恐怖ではなく、優しく説明し、抱きしめて寝ける(リチャー)。あまへの原点は胎児期にあるのではないか。子宮内と同様な、まるくなる抱っこをすると泣き止む。出生直後から、泣いている、抱っこすると泣き止む、寝さすと泣く、再度抱っこをすると泣き止む。あまえている。目を見つめて話しかけるとじっと見つめ返してくる。1か月すると、ニコッと笑う、2か月すると、ニコッと笑い、クークーと返事をする。母との関わりを求めており、あまえではないか。3か月、母があやすとにこにこして、クークーお話しをするが、知らない人には見詰めるのみである。母にあまえている。母も可愛くなり益々働きかける。親子が楽しんでおり、間主観的相互作用である。5か月、母は益々可愛くなり、働きかける。子どもも母に益々くっつき、あまえる。10か月、何があっても母がおれば安心でき、心の安全基地ができだす。1歳過ぎると母に激しくあまえるようになる。母も「うるさい」と思いながらもすごく可愛くなる。1歳半より再接近期(マラー)、[いやいや期]に入る。母に対して激しいあまえと、母から独立したい「触るな!」の相反する気持ちが混在する。あまえも、わがままも一番激しくなる。できるだけ受け入れ、躰は抱きしめてする。幼児初期に躰をきちっとしてないと、大きくなってから手に負えなくなる危険性がある。4歳になると、あまえは続くがだんだんと聞き分けよくなり、徐々に心の中の母親像ができだす。激しいあまえは小学校3年生頃まで続き、その後は徐々に軽くなり、反抗期に入ってくる。なお幼児の気になる言動に対して、あまえて満たす(あまえ療法)ことで、ほとんどは落ち着く。全ての母は生活に追われ、常時子どもの心を満たしてやることはできない。虐待ではなくても、躰で怒られたり、要求が満たされなく我慢をしたり、遊んでもらえなかったり、毎日、小さな心の傷(マイクロ・トラウマ)を受けている。母に時間的余裕が出来た時、あまえを受け入れてやれば、マイクロ・トラウマは癒されるが(あまえ療法)、あまへの受容が出来ないと、マイクロ・トラウマの累積外傷となり、精神的虐待と同様な症状を出す危険性がある。あまえ受容できる母は、「この子に恵まれて良かった。可愛い」と思っている。充分にあまえを受容できない母が約10%いる。子ども時代にあまえた経験がないか、今何か辛いことを抱えている。母に同一化・共感し、話を十分聞き、優しさに支える。お説教はしない。あまえは親子の心の妙薬である。